劇場体験を、ひとりでも多くの人に——

舞台手話通訳付き公演『楽屋』事業報告書
2023年2月発行
豊橋市／公益財団法人豊橋文化振興財団

特別協賛 sala サーラグループ

令和4年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
TOYOHASHI ARTS THEATRE

シェアする演劇

舞台手話通訳付き公演

『楽屋ー流れ去るものはやがてなつかしきー』

事業報告書

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
TOYOHASHI ARTS THEATRE

ふたつの言語で切り拓いた劇場の新たな可能性

公立文化施設では「Accessibility（アクセシビリティ）」に対する取り組みが大きな課題となっています。豊橋市立である穂の国とよはし芸術劇場PLAT（以下、プラット）も同様で、誰もが来場しやすい、気軽にアクセスしやすい環境整備が求められています。劇場は扉を開けて待っていれば良いのではなく、この国に暮らすあらゆる人を想像して企画・運営を行う必要があるのです。子育て世代や乳幼児、高齢者、在留外国人など、時間的・身体的な制約、母語の違いといった事情でどうしても劇場から足が遠のく人はいます。そこには障がいのある人たちもいるでしょう。

プラットでは2022年9月、アクセシビリティ向上の一環で「舞台手話通訳付き公演」として『楽屋ー流れ去るものはやがてなつかしきー』を製作しました。この企画は主にふたつの点で成果をあげました。ひとつは障がいの有無に関わらず多くの来場者が劇場体験を共有できたこと。もうひとつは、演劇における新たな挑戦が作品をさらに芸術的な高みへ押し上げたことです。欧米のアートシーンではアクセシビリティの課題と向き合うことにより積極的で、その根底には鑑賞者の拡大だけではなく、アーティストのステップアップにつながるという考えがあります。バリアフリーへのチャレンジは他者のためではなく、自己のためになるというわけです。

一方、日本は東京オリンピック・パラリンピックを経て、共生社会の実現をますます具現化していく途上にあります。2018年には「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」（障害者文化芸術推進法）が公布され、文化芸術を通じた障がい者の社会参加の促進は必須。現在は文化庁と厚生労働省が中心となり、2023年3月公表をめどに2期目の基本計画も策定中です。その根底にあるのは、文化芸術を趣味や娯楽の延長線上のものとせず、憲法に保障された人権としてすべての国民が享受できなければいけないという考え。それは特定の人に対する配慮ではなく、私たちの誰もが生きやすい社会への一歩なのです。

文化芸術を巡る国内外の動きは、どんな人も孤立させない「social inclusion（ソーシャル・インクルージョン）」という意識の高まりと相まって現代社会の潮流となっています。プラットは今後を見据え、国内でまだ事例の少ない舞台手話通訳付き公演を試みました。この報告書では稽古から本番まで要所をしぼり、現場の様子をお伝えします。

data

舞台手話通訳付き公演『楽屋ー流れ去るものはやがてなつかしきー』
2022年9月10日・11日
穂の国とよはし芸術劇場 PLAT アートスペース

出演：ののあざみ（yum yum cheese!）／大浦千佳
服部容子／小野里満子
舞台手話通訳：加藤真紀子（TA-net）／高田美香（TA-net）
水野里香（TA-net）

作：清水邦夫
演出：樋口ミユ（Plant M）
手話監修：河合依子（岐阜ろう劇団いぶき）／八百谷梨江
舞台美術：濱崎賢二
衣裳：富永美夏
照明：坂本知孝／池田俊晴（穂の国とよはし芸術劇場）
音響：佐原宏信（穂の国とよはし芸術劇場）
舞台監督：片桐 健（穂の国とよはし芸術劇場）
テクニカルマネージャー：笠井隆行（穂の国とよはし芸術劇場）
宣伝美術：岸本昌也
宣伝写真：萩原ヤスオ
舞台写真：伊藤華織
記録撮影：田中博之
稽古手話通訳：TA-net（亀井明子／新納真梨子／野上まり）
芸術文化プロデューサー：矢作勝義（穂の国とよはし芸術劇場）
制作：吉川剛史／大橋 玲／加賀茅捺（穂の国とよはし芸術劇場）
票券：長坂奈保美（穂の国とよはし芸術劇場）
協力：新井理恵／岐阜ろう劇団いぶき／株式会社nora／劇団ひまわり
Plant M／yum yum cheese!

主催：豊橋市、公益財団法人豊橋文化振興財団
特別協賛：sala サーラグループ
協力：特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）
企画制作：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT
令和4年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

文化庁

8月29日 稽古開始

8月29日、稽古開始。演出の樋口ミユとキャスト4人が全国から集まります。初日はアートスペースの空間や舞台装置の確認後、台本の読み合わせ。また後日合流予定の手話通訳者3人も駆けつけました。本番までは2週間足らず。キャストは事前に台本を読み込んでおり、2日目から早くも立ち稽古が始まります。ののあざみのように樋口の創作をよく知る俳優の存在もあり、手話通訳者が稽古に加わる前に芝居の大枠が形づくられていきました。

初日は台本を最後まで通した後、樋口が解釈や演出プランを説明。意見交換の場面もあり、演出と俳優の垣根なく稽古は進行しました。その中で「見えない存在に立ち上がらされることはある。劇場とはそういうところ」という樋口の言葉が印象に残ります。俳優は先人たちの想いがしみついた劇場で、しかばねの上に立っているとも言えます。この視点は『楽屋』という作品の本質はもとより、手話通訳者の存在とも密接に関わっていきます。

演劇的には劇場機構を活かす方向でも工夫を凝らしました。メイン舞台を囲む床板をはずし、奈落も使って死の淵とおぼしきイメージを創出。生と死の境界にある物語を増幅させます。ただし、事故につながりかねない果敢な趣向につき、稽古初日はもちろん事あるごとに樋口が声掛け。公演当日も開演前・終演後の観客誘導に細心の注意を払いました。

関係者紹介

◉キャスト

ののあざみ（女優A）

大浦千佳（女優B）

服部容子（女優C）

小野里満子（女優D）

◉手話通訳

加藤真紀子

高田美香

水野里香

◉演出

樋口ミユ

劇作家・演出家。1995年に劇団Uglyduckling旗揚げに参加、関西を拠点に活躍。2011年に解散するまで32本の戯曲を発表する。その後、座・高円寺の劇場創造アカデミー演出コースで佐藤信に師事。2012年からPlant Mを主宰。全国で演劇活動を展開している。

column

上演作品『楽屋』について

『楽屋』は劇作家・清水邦夫が1977年に発表した戯曲。出演者4人の比較的小規模な構成で、実験的な公演にも適するのではないかと考えました。登場人物は、ある劇場の楽屋に住みつく幽霊の女優Aと女優B、そこでヒロインを演じる女優C、女優Cの座を狙う若き女優D。彼女たちの役にかける執念が生と死の狭間に浮かび上がります。またチェーホフやシェイクスピア、三好十郎の名作などの引用も多く、名作の名セリフを味わえるのも魅力。

『凛然グッドバイ』を経て

プラットは2022年2月にも舞台手話通訳付き公演に挑み、樋口の戯曲『凛然グッドバイ』をリーディング形式で披露。それを経て今回、本格的な演劇製作を実現させました。引き続き加藤真紀子、高田美香、水野里香が手話通訳を担当できたことも幸運な巡り合わせ。なお、『凛然グッドバイ』はドキュメンタリー映画『こころの通訳者たち』の題材となり、8月に『楽屋』関連事業として上映。11月には名古屋の映画館でも上映され、好評を博しています。

9月3日
手話通訳加入

9月3日、手話通訳者が本格合流。まず午前中に俳優の通し稽古を観て、劇全体の流れや立ち位置、動線などを確認しました。休憩を挟んで午後からは、いよいよ手話通訳者が稽古に参加。一人の登場人物に対して一人の手話通訳者がつく形ではないので、3人は役に関係なく代わるがわる通訳します。手話の見え方が重要な企画なので途中何度も課題が持ち上がりますが、ひとまず最後のカーテンコールまで進み、現場の集中力の高さを感じました。

手話通訳者の自主稽古。セリフを追いながら適した手話表現を統一するのはもちろん、劇のニュアンスをいかに伝えるかも手話通訳者の技術や経験に掛かってくるため、作者や演出家の意図を丁寧に協議していきます。その上、奈落に降りて鉄砲階段と呼ばれるハシゴから舞台に上がるなど俳優同様の演技まであり、手話通訳以外でも大忙し!

劇中、ラフマニノフの楽曲が随所に流れますが、その情報も必要に応じて伝えていきます。ただし、幕開けは女優Aが単独で登場するため手話通訳者がいません。そこで冒頭だけ、のの演じる女優Aが「祈りの音楽が流れている」と手話で表現します。

手話通訳者が稽古に本格加入すると各人の動線が明確になり、舞台上のルールも詰められていきます。楽屋鏡になぞらえた装置が並ぶ中、中央の大鏡だけは生と死を分かつ境界の象徴として機能。手話通訳者は出番以外、奥の鏡前で後ろ向きに座ります。四角い枠を主体とした装置にはLEDが仕込まれていて非常に映える半面、観客の視界を遮る場合があり、手話通訳者の立ち位置に苦慮。また手話通訳者と俳優の視野や死角の問題もあがり、観客にとって最善の選択をすべく動線の見直し、装置の一部修正などが行われました。

9月7日
監修による指導

9月7日、河合依子による監修作業が始まりました。河合は「岐阜ろう劇団いぶき」の代表で、全日本ろう者演劇協会の会長も務めるベテラン。3日に渡って彼女に来てもらい、稽古は大詰めを迎えます。1日目の通し稽古は本番さながらに音響・照明を入れ、手話通訳者を含めた演者全員が衣裳を着用。通しを終えた後は樋口による振り返りと同時進行で、河合からの意見が述べられました。

河合からはセリフと手話の意味合いのすり合わせ、感情の起伏と手話が一致しているかの問いかけなど、全編にわたって指摘がありました。そして、ここでも見え方がいちばんの問題点。装置と手話がカブる件に加え、照明で影が生まれると手話や表情がわかりにくくなる事案も発生。手話通訳者は立ち位置や身体の角度を調整し、制作サイドでも観客誘導に配慮する対応を提案しました。なお、監修アシスタントとして同じくろう者の八百谷梨江が参加しています。

『楽屋』は名作からセリフが引用されていて、それを女優が演じる場面も多々あります。特に前半の女優Aと女優Bはめまぐるしく演じ分けて見せますが、女優自身と役の個性をそれぞれ手話にも施すべきだと河合から指摘があり、ちょっと驚かされました。セリフ回しが早い時には同時通訳だけでも大変なのに、キャラクター付けまでとは!!

他にも女優Dの変化、曲調の変化など、できる限り的確に伝わるよう細かい指導が入りました。

出演する手話通訳とは別に、稽古場における手話通訳が参加。演出・演者・監修がお互いの意図を伝える際のサポートを行いました。時おり舞台手話通訳者の3人が演出・演者側の意図も伝えながら、河合の意見を整理。中でも演劇経験のある加藤は積極的に仲介し、座組の円滑なコミュニケーションを図りました。

9月10日 公演開幕

9月10日、公演開幕。ロビーには大勢の人が集まり、スタッフが整列を促します。初日はポータブル字幕機4台すべて予約済みで、障がいのない来場者からの質問もチラホラ。期待や関心の高さがうかがえます。開場すると、15分ほどで客席センターブロックの大半は埋まりました。翌11日も盛況のうちに終演。樋口とキャスト、手話通訳者はいつもどおり振り返りを行い、舞台手話通訳付き公演『楽屋』は無事に幕を下ろしました。

『楽屋』は言葉の話とも言えます。演劇人は言葉で格闘してきた歴史があることを、この劇はシェイクスピアやチェーホフ、三好十郎らの名場面の引用で示唆しています。そこに手話が入った今回、言葉の力が目に見えて際立ち、増幅されました。手話通訳者3人はアフタートークで「通訳するのは劇の言葉なので、考える余白を残し、自分自身の解釈を抑えている」（加藤）、「日常の言葉と戯曲の言葉は異なり、受け手に委ねるべきこともある」（高田）、「演劇では俳優と登場人物の二重性を受け止めて通訳する必要がある。これほど一体となる現場は他にない」（水野）と言葉の難しさを語りつつ、だからこそ創造的な面白さがあることも教えてくれました。

幕開け、のの演じる女優Aが登場。音楽が流れていることを手話で伝え、結果として俳優と手話通訳者の垣根のなさを象徴的に浮かび上がらせました。続いて水野が登場し、奈落を通って舞台上へ。手話通訳者3人とも位置に着くと、上手・下手の鏡前で代わるがわる通訳を行います。

手話通訳者は、いるけれどいない、いないけどいるという不思議な立場にあります。劇が進むにつれ手話通訳者も女優の亡霊に見えてきて、樋口の発言が思い出されます。「見えない存在に立ち上がらされることはある。劇場とはそういうところ」。手話通訳者の存在は『楽屋』という作品にズバリはまったと感じました。さらに演出は冴え、『三人姉妹』の劇中劇で女優3人と手話通訳者3人が一対一で呼応。手話通訳者が俳優の前に出て、闇から届いたようなナレーションを表現すると、死の恐ろしさや哀しみが広がりました。

観客からはいろんな意見がありましたが、客席全体が同じリアクションをする瞬間があったことには喜びや励みを得ました。障がいの有無に関わらず共有できることを増やせば、人生も分かち合えます。『楽屋』は、劇場の可能性をまたひとつ切り拓いてくれました。

終演後は両日ともにアフタートークを開催。舞台には樋口と手話通訳者3人が登場。矢作勝義プロデューサーが進行役を務めました。樋口は前作『凛然グッドバイ』を経験して「手話を芸術的表現として取り入れられることがわかった」と話し、手話通訳者も演者に組み込んだ経緯を説明。矢作はプラットとTA-net（ターネット）の関係性を踏まえつつ、豊橋近辺に3人もの優れた手話通訳者がいたからこそ企画が実現できたと補足しました。

column

手話以外でも鑑賞をサポート

聴覚障がい者の中には手話を用いない人もいるため、手話通訳の他にセリフや音楽などが説明されるポータブル字幕機、音声や音楽を聴きやすくするFM補聴器の貸し出しも実施しました。アフタートークは手話通訳のみでしたが、事前に音声認識のアプリケーション「UDトーク」に誘導するQRコードを案内。できる限り様々な聴覚障がい者に配慮しました。

タブレット型のポータブル字幕機

タブレットによる字幕チェック

聴覚および視覚障がい者をご招待

豊橋市と特別協賛のサーラグループの提供で、聴覚障がい者・視覚障がい者・付添者を対象に招待枠も用意。オンラインとFAXで受付を行った結果、抽選で両日合わせて14名の来場がありました。当選者には当日受付で、手話通訳・筆談を交えて対応しました。

VOICE 観客からの声（抜粋）

補聴器をつけて生活をしているので、音声も聞き取りながら字幕や手話で補っています。今回の公演でも音声が時々聞き取れたのですが、手話表現と音声と全く一緒ではないので、理解に苦労したところもある気がします。でも言葉をそのまま手話通訳しているわけではないので、手話から読み取れる物語に引き込まれ、とても楽しめました。誰の言葉を通訳しているのか分からないことがあったので少し残念でした。口が動いているのが見えないと誰が話しているのか分からないので、次の機会があったら解決できているとうれしい。

（豊橋市・女性）

今回はタブレット利用での字幕付きにひかれて鑑賞。タブレット字幕は文字数が多すぎる。読み取り中には手話の演技が全く見えない。タブレット画面は、一度に多くて三列ぐらいになる様に要約された方が手話演技が鑑賞し易い。タブレットの俳優マークがカラーで表示してあって良かったが、会話自体までカラー表示された方がわかりやすい。

（豊橋市・男性）

劇中、客席からの見やすさは問題なかったのですが、開幕前のアナウンス中はお客様が出入りされるため手話通訳が見えず困る事はありました。通訳者の立ち位置と出入りのお客様の動線を今後は改善して頂けると有り難く思います。鑑賞サポートの字幕タブレットのおかげで名前や細かいセリフを理解できたのは、とても助かりました。このような鑑賞サポートは初めての体験でしたが、今後も是非利用させていたきたいと思っています。

（名古屋市・女性）

舞台セット、役者の登場シーンから引き込まれました。『楽屋』の世界観、役者さんや舞台手話通訳者さんたちの信頼関係が伝わる一体感。戯曲の面白さと舞台上のアーティスティックな面があいまってとても魅力的な作品でした。

（50代・女性）

「鑑賞サポート」を越えた表現を楽しく拝見しました。すごいの一言です。

（30代・男性）

舞台手話通訳付き公演を初めて観ました。『楽屋』の内容も全く知らない状態だったので、手話がつくことが前提となっている脚本のように感じました。手話通訳者さんがいることで、より魅力的な舞台になっていたと思います。

（20代・女性）

私は普段、視覚障害の方とかかわっているので、ちょっとだけ手話経験もあります。「舞台手話通訳」目当てで来たのですが、お芝居としておもしろかった。

（40代・男性）

手話を勉強し始めたばかりで、たまに趣味で芝居をしている者です。手話を勉強する最終目標に迷っていましたが、こういう芝居をすることを目標にしたいなと思いました。

（女性）

大変面白かった。なんとなくメタフィクショナルな感じも良い。手話通訳の方々が舞台上に役者として参加しているのも、さらにその感じを強めておもしろかったです。

（男性）

100%のバリアフリーを目指すのではなく、選択肢が少しでも増えるような取り組みを今後も継続してほしい。

（40代）